

## 自分を欺いてはならない

有力な指導者たちを頭（かしら）に祭り上げて、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」と主張し、彼らとのつながりを誇りとし、或いは、そうすることによって自分の知恵と立場を誇示し、自分の栄光を求めようとするコリントの分派主義者たちに、使徒パウロは「だれも自分を欺いてはなりません。もしあなたがたのだけれかが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵ある者となるために愚かな者になりなさい。（なぜなら）この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです」という（3：18～19）。

ここで「自分を欺いてはならない」というのは、人間的な知恵や能力や影響力を誇り、神に属する栄光を人間に帰そうとするコリントの分派主義者たちの霊的な傲慢（ごうまん）に対する鋭い警告の言葉である。

「欺く」と訳されている言葉は、サタンがエバを「欺いて」罪を犯させたというときに使われている言葉と同じである（第2コリント11：3、第1テモテ2：14）。或る個人訳聖書ではこれを「自分自身について幻想を抱いてはならない」と訳している（柳生直行訳）。分かり易い訳である。確かに罪は人間に、自分が特別な存在であるかのような幻想をいだかせ、神の前に人間を傲慢にさせるのである。

このような自己欺瞞と思い上がりから出て来る傲慢な心が、人をして他人をさばかせ、教会の中にねたみと争いを引き起こすものであることを使徒パウロは良く知っていた（3：3）。「ガラテヤの信徒への手紙」でも彼は警告する。「実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思ふ人がいるなら、その人は自分自身を欺いています」と（6：3）。

これらの使徒パウロの言葉は、今日の私たちにに対する警告の言葉でもあると思う。自分を正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下げ卑しめたフェリサイ人の欺瞞性を譬えに用いて鋭く指摘された主イエス・キリストの教えを私たちに思い起こさせる（ルカ18：9～14）。

古代ギリシャの哲学者ソクラテスでさえ「汝、自身を知れ」と自分を吟味することの徳を教えたというが、キリスト者はなおさら、自分が神の御前に何者でもない、愚かなものにすぎないことを謙虚に認め、常に身を低くして歩むことを学ばなければならない。

私たちは皆、あからさまではないとしても、自分を誇ろうとする心を持っている。しかし神の御前における自分の卑小さや足りなさ、愚かさを悟ったときはじめて、人は真の意味で知者となるということを使徒は私たちに教える。旧約聖書の「箴言」の著者が「主を恐れることは知恵の初めである」と言っている通りである（9：10）。知恵あるキリスト者とは神の前に自分の罪深さと愚かさを真の意味で悟った人のことである。

こうして使徒パウロは、知恵ある者であるかのように自分を誇り、あるいは自分の好みに合わせて指導者たちを頭に祭り上げてその知恵や力を崇めようとするコリントの分派主義の過ちを指摘し、パウロでもない、アポロでもない、ケファ（ペテロ）でもない、すべてのもののすべてであられる神のみを誇り、その恵みに謙虚に生きることこそキリスト者の信仰の真髄であると教えるのである（22～23節）